令和元年度　福井型コミュニティ・スクール　実施報告書

永平寺町永平寺中学校

１「家庭・地域・学校協議会」の運営について

（１）「家庭・地域・学校協議会」の構成

【地域】

本校同窓会長（町議会議員）(1)
町商工会議所職員(1)　　主任児童委員(1)
町社会福祉協議会職員(1)　　地域有識者(1)

⇕

【家庭】ＰＴＡ会長 ⇔ 家庭・地域・学校協議会 ⇔ 【学校】校長・教頭・教務主任

地域コーディネーター(3名)
町商工会議所職員、町社会福祉協議会職員、PTA会長

（２）協議会の内容

開催回数　３回
開催日程　６月１２日（水）
１１月２６日（火）
２月１８日（火）
協議内容　家庭･地域･学校協議会の趣旨
学校評価の実施と活用
学校開放日の実施と活用
地域人材の活用および連携

（３）協議会における成果と課題

第１回協議会にて、協議会の設置意義と学校経営方針(スクールプラン)の説明をしたところ、積極的に協力したいとの意見をいただき、ボランティア活動の情報を提供していただいたり、各地区の保護者に協力をいただいたりすることができたので、活動に参加する生徒も増えてきた。

各回の協議会では、日頃の教育活動の様子や学校開放日の様子を写真や動画で紹介した。学校評価結果についても併せて説明したところ、学校が地域に開放されていることがわかり安心したとの意見をいただいた。

引き続き、ふるさとに恩返ししてくれる子ども、自発的に地域に関わっていこうとする子どもを育てていってほしいとの意見をいただいた。

２　地域と進める体験活動

（１）活動のねらい

中学生になると、なかなか地域の活動に参加できないことが多い。部活動や学習を優先してきたために、生徒も保護者も地域での活動への参加が少なくなってきているように思う。自分たちの住む地域のためにできることを知り、活動に参加することを始め、そして将来その企画運営の中心となる人材育成をめざす。

平成２９・３０年度は、この事業をきっかけに、「地域のためにできる第一歩」として、地域で行われる行事やボランティア活動に積極的に参加し、その様子を地域の方々に発信した。今年度は、その輪を広げ、各地区での活動に積極的に取り組み、町全体の行事である「大燈籠ながし」等へのボランティア活動に学校全体で取り組む。地域と生徒たち・学校との距離を近いものにしてくれることをねらっていく。そして、企画の段階から生徒が主体となって活動してくれることを期待し、今以上にますます生徒の手による「地域との交流」を図る。

（２）活動の実際

①各地区ボランティア活動

５月のＰＴＡ総会の折に、本事業について保護者に説明し、生徒が地域貢献として各地区での行事や奉仕活動に地域の一員として参加できるよう協力を得た。

お神輿巡行応援

空き缶拾い
地区祭礼での屋台運営
区内の花壇に苗の植え付け
老人会イベント手伝い　等

②イベントボランティア

・九頭竜フェスティバル2019永平寺大燈籠ながしへの参加
　（燈籠づくり、燈籠販売、燈籠運搬、会場美化、燈籠渡し等）
・永平寺地区幼児園の夕涼み会イベントコーナー
・大本山永平寺門前での赤い羽根共同募金活動
・永平寺地区体育祭あいさつ運動

③サマーボランティア

社会福祉協議会に協力を依頼し、地域の方々との交流を行った。
・永平寺デイサービスの夏祭りボランティア
・居宅介護支援事業所「ほっこり」施設訪問

④広報活動

本年度の活動の記録をリーフレットにまとめ、
永平寺地区に全戸配布した。

（３）地域コーディネーターの活動概要

家庭・地域・学校協議会の委員の方々に地域コーディネーターを依頼した。地域との橋渡しは、本校保護者代表を通じ、各地区委員を中心として行った。町の行事や福祉活動については、町社会福祉協議会の協力を得るとともに、地域との連携についてアイデアや助言をいただいた。

（４）特に工夫した事項

・２年目に引き続き、ＰＴＡ各地区委員の方々にコーディネーターを依頼し、中学生が地域の活動に参加しやすいよう、協力を依頼した。
・ボランティアとして参加できる町内の行事や、各地区の活動について情報収集を行い、生徒に情報を与えた。
・本年度、第１学年では、総合的な学習の時間に、ふるさと永平寺町の特長を調べて文化祭で発表し、さらに、永平寺町の課題について福井市や福井県の施策を参考にその解決方法を考え、発表する活動を行った。これにより、ふるさとに対する理解を深め、ふるさとに貢献しようとする意識を高めるようにした。

３　成果と課題

「地域に飛び出すボランティア活動」をキャッチフレーズにした本活動も３年目を終えた。適切に部活動の休養日を設定し、生徒が地域の活動に参加しやすいよう配慮したほか、生徒の中にもボランティア活動に対する意識が高まり、町内行事や地区の活動に参加することを当たり前のこととして捉えるようになってきた。

また、それぞれの活動については事前に参加希望者を募っているが、当日になって自分の意志で参加し、イベントを運営したり盛り上げたりする生徒も見られるようになってきており、生徒が受け身で参加しがちであるというこれまでの課題も少しずつ解決しつつある。

一方で、保護者や各団体が主導の活動が中心となることが多いことが課題である。生徒の中に育ちつつあるふるさとに対する理解や愛情の深まりとも合わせ、今後は、生徒が主体となり、企画・提案・運営する形になるよう工夫していきたい。